惜別

スペイン思想研究家　佐々木孝（ささきたかし）さん

文章武器に　福島で闘った

天の配剤だったのだと思う。文章を武器に闘える思想家が、あの日、あの場所に暮らしていたことは。

上智大を卒業。清泉女子大などで30年余り、スペイン語や文学、哲学を教えた後、故郷の福島県南相馬市に戻った。認知症を患った妻、美子（よしこ）さん(75)を介護する静かな生活。そこへ東日本大震災と原発事故が襲う。

福島第一原発から25キロ。市は避難を促したが、最初から逃げるつもりはなかった。妻が避難所の生活に耐えられないのは明らかだったからだ。

周囲の住民がいなくなり「死の静寂に包まれている」なか、「モノディアロゴス（独対話）」と題したブログで精力的に発信を続けた。「わが愛する日本が、日本人が、非常時にこそなお沈着冷静に、しかも人間らしく行動できる社会そして人間であってほしい」という願いは痛切だった。震災前は1日平均150ほどのアクセスが5千近くに跳ね上がった。

「奈落の底」にいる生活者の言葉に力があったのは、スペインの哲人ウナムーノやオルテガの研究で鍛えられていたからだろう。スペイン語圏をはじめ海外から多くの取材者や芸術家が南相馬に引き寄せられた。ブログをまとめた著書「原発禍を生きる」は中国語、韓国語、スペイン語に翻訳された。

「妻のおかげで魂の重心を低くでき、不思議な勇気と落ち着きをもらった気がします」と語っていた。「病、老化、そして死も、生きることの大事な要素です。それを排除し、見ないようにすれば、やわな社会になってしまうと思うのです」

（編集委員・浜田陽太郎）

英語教師の美子さん（手前）とは「お互い一目ぼれ」だったという佐々木孝さん＝2016年、福島県南相馬市

2018年12月20日死去（肺がん）　79歳

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.